
進め！ 学園**

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進め！ 学園*

【Nコード】

N74650

【作者名】

Rail

【あらすじ】

とある私立の女子高校は、世間一般ではいわゆるお嬢様学校として認識されている。戦前から存在したその女子高校は中高一貫教育で、偏差値も全国的に見て高く、セレブ率も高い。

校風ゆえかおっとりした生徒が多いので、普段は至って平和なのだが？

学園ギャグコメディです。

（前書き）

高校の時に製作したラジオドラマの台本が出てきたので改訂してみました。

あほっぽい話です。

とある私立の女子高校は、世間一般ではいわゆるお嬢様学校として認識されている。戦前から存在したその女子高校は中高一貫教育で、偏差値も全国的に見て高く、セレブ率も高い。

校風ゆえかおっとりした生徒が多いので、普段は至って平和なのだが、

「きゃあああああ！」

昼休みを告げるチャイムが鳴って数分後、甲高い悲鳴が教室に響いた。

「なんや!？」

いざ昼食とお弁当を片手に友人とともに教室を出ようとしていた竜胆はぎよつとして振り返った。

いち早く悲鳴の主に気付いたのは竜胆の後ろを歩いていた椿で、黒髪のポニーテールをさつとひるがえして悲鳴の主の元へと駆け寄った。彼女が振り返った時にその長い髪の手が竜胆の顔を強打していたが、椿が気付くことはなかった。悲しいかな、いつものことである。

「桜さん、どうしたんだ？」

棒立ちになって唇をわなわなとふるわせている悲鳴の主に、椿は声をかける。

「わ、わたくしの……」

そう言って、桜は口元を手で覆った。

「わたくしのシェフ特製スペシャル弁当が食べられていますわっ！」
「ええ？」

訝しげに桜の指さすものを見てみれば、確かに中身が空っぽになったお弁当があった。ご飯粒の一つも残さず食べられている。スペシャル弁当と言っただけあって、弁当箱がすでに豪華である。中身はさぞや美味しかったのだろうと思われた。

「ねえ、リンちゃん、椿ちゃん。何かあったの？」

と、そこへ竜胆や椿より先に教室を出ていた向日葵ひまわりがのんびりとした様子でやってきた。ただならぬ様子の桜を見て首を傾げている。竜胆は肩をすくめた。

「どうも、桜さんの弁当が誰かに食べられたみたいやねん」
「え、もしかしてあの連続お弁当泥棒の？」

向日葵は目を丸くした。

この女子高、普段は至って平和な学園なのだが、最近は何者かにお弁当が食べられるという微妙な事件が起こっていた。昼食時にお弁当を開けるとすでに中身が何者かによって食べられているのである。時折弁当箱を洗って返してくれるという律義な食い逃げ犯なのだ。ものがものだけに、学園側としても自警を呼び掛けることしかできないのが現状である。

とはいえ、たかが弁当されど弁当。食べ物の恨みというのは恐ろしいのだ。それはお嬢様として例外ではない。

「桜さん、気を落とさないでね」

椿が桜の肩を叩くが、キツと鋭い目で睨まれた。

「まあ！ まるで他人事みたいに！ そもそもお弁当が食べられたのはあなた方がしっかりしていなかったでしょう、この役立たず！」

面と向かってそんなことを言われ、竜胆は眉をしかめて反論した。

「そういう言い方あらへんやろ。お弁当盗まれたんが腹立つんは分かるけど、あんたの管理も」

「言い訳は結構ですわ！ もう！ 今日もカフェテリアで食べなくては！」

刺々しく言い捨てると、桜は足音高く去って行った。

桜の剣幕に啞然としていた向日葵は、やがてパチパチと目を瞬かせた。

「桜さんってばひどーい！ いくらお腹がすいてるからって、あんまりだよ」

向日葵はぷうつと頬を膨らませた。竜胆もそれに同意する。

「役立たずなんて言われんのは心外やでなあ。日ごろから頑張ってるのに」

二人がうんうんとうなずき合っていると、今まで黙っていた椿がぽつりと言った。

「なあ、あそこまで言われて何もしないなんて駄目だよな」

椿の発言に向日葵がぎくりとした。

「椿ちゃん、もしかしてアレ？　だったらあたし嫌だよ」

じりじりと後ずさりながら逃げようとする向日葵の腕を、椿が掴む。

「何を言う！　学園のマドンナの弁当が盗まれたんだぞ？　これ以上、手をこまねいてるわけにはいかないだろう！」

「……なんや椿、めっちゃ嬉しそう」

っていつか学園のマドンナってお前いつの時代の人間やねん。

「ともかく、実はすでに学園長から指令が下っているんだ。さあやるぞー！」

椿はすでにノリノリだ。が、

「いくらバイトだったって、嫌！」

向日葵が断固とした口調で言い放った。

椿が口を開く前に、竜胆が向日葵の肩をがっしりと掴む。

「なあヒマちゃん。実はうち、今月ピンチやねん。今回バイト料入ったら弟の弁当が日の丸弁当からそばろご飯ぐらいにはグレードアップできんねん。後生やからやってんか」

「うー……………」

必死な口調で竜胆が言う。実際このアルバイトに親友である竜胆の家の食生活が大いに助けられていることを知っている身としては、この場で逃走するのは憚られた。

何しろこのアルバイトは三人一組でしないと報酬が支払われないのだから。

しかしそれでも踏ん切りのつかない向日葵に、もうひと押しとばかりに竜胆が続けた。

「ほら、頑張つて犯人捕まえて、桜さんをぎゃふんと言わせたる！」

「実際に言ってる人、見たことないけどな」

「椿は黙っとけ！」

「……うう、しょうがないなあ。リンちゃんの頼みだもんね」

がつくりとうなだれる向日葵とは反対に、椿が瞳を輝かせる。

「よし、それじゃあ変身するぞ！」

椿の声を合図に、軽快な音楽が流れてきた。

「我ら世のため人のため」

「学園の平和を守るためー」

「正義の力で開くを滅ぼす！」

「『学園戦隊タイツマン！』」

「説明しよう！ 学園戦隊タイツマンとは、学園長の指令によって動く学園長直属、学園の平和を守るための生徒による特殊機関なのである！」

「あんたは誰に説明してんねん」

竜胆は嬉々として喋る椿の頭をばしりと叩いた。

変身という名の全身タイツへの着替えに向日葵はぐすんと鼻を鳴らす。

「いくらバイトとはいえ、全身タイツだなんて……」

「我慢しい。そもそもこの学園戦隊が学園長の趣味なんやから」

諦めをにじませた表情の竜胆が向日葵の背中をポンポンと叩く。

この嫌でも悪目立ちする衣装（しかもそれぞれ赤、青、黄色の原色）のせいで、三人はいやが上にも目立っていた。いくらお昼休みとはいえ、いくら学園が女子高とはいえ、年頃の女の子にとっては痛恨の一撃であることは間違いない。

優しい友人たちは三人のことを見て見ぬふりをしてくれる。

すでにテンションが落ちている二人を見て、椿がさも心外だと言う風に言う。

「二人とも、失礼だなあ。このタイツマンの衣装はこの学園の伝統的な衣装なんだぞ」

「そんな伝統なくしてまえ！」

間違いなく負の因習である。

「大体、全身タイツだけでも痛いのに花柄って変でしょ！ しかも原色！」

向日葵が抗議すると、椿は愉快そうに笑った。

「二人にはまだこのハイセンスが理解できないのかもね。私も小学校六年生くらいまでは理解できなかったからな」

「椿はその時までにはまともやったんやな」

うちは一生涯理解したくない、と竜胆はしみじみ思う。平成ライダーや平成戦隊物がカッコいいと思わないでもないが、実生活で自分がやるとなったら普通の人は全力拒否すると思う。竜胆だってバイト料が出ないなら絶対にしない。

「リンちゃん、椿ちゃん、早く犯人捕まえようよ。あたしこの格好で長時間いたくない！」

向日葵の痛切な言葉に竜胆はうなずく。

そうして三人による連続弁当窃盗犯探しが始まったのである。

十数分後、三人はがつくりと肩を落としていた。

精力的な聞き込み調査にも関わらず、犯人に関する手掛かりがほとんど手に入らなかったのだ。分かったことと言えば精々、犯人が盗む弁当は一日一つ、手作りの弁当限定らしいということぐらいなものだ。

そもそも三人が行動を開始したのは昼休みが始まってからだいぶ時間が立っており、被害者含め生徒たちは広い学園内の敷地に散ら

ばってしまっていた。関係者から話を聞くだけでも一苦勞である。

「視線が痛いよう……皆が笑ってるよう……」

向日葵がしくしくと泣く。彼女の肩を竜胆がそつと叩いた。

「ちゃうで、向日葵。みんな笑ってるんやない、同情してくれてんねんで？」

救いようがない。

「二人とも何を言ってるんだ。タイツマンは学園の誇りだぞ。そんなわけないだろう」

「ホコリなら塵取りで取って捨ててええか？」

「笑われるよう……」

仮にも戦隊だというのに、三人とも清々しいほど息が合っていない。向日葵に至っては完全にいじけてしまい、壁にのの字を書いていた。

と、椿の頭に紙飛行機がぶつかった。

そのまま地面に墜落した紙飛行機はどうやら手紙を折ったものらしい。

椿はそれを拾い上げると広げて内容を読んでみた。そしてはっと息を飲む。

「椿、どないしたんや？ なになに、『弁当窃盗犯を探すな。さもなくば危害を加える』！？ なんやこれ、脅迫状やないか！」

三人で慌てて周囲を見渡してみるが、紙飛行機を飛ばしたらしき

人間は見あたらなかった。

「うわー、怖い！ 脅迫状が来るなんて危険すぎるよね！ 学園長に言って調査中止にしよう！」

「向日葵、そんなガッツポーズせんでも」

「いいや、調査は続行するぞ！ これは犯人からの挑戦状だ！ ここで負けたらタイツマンの名折れ！ 負けるな向日葵！」

「いや、脅迫状やろ。っていうか向日葵は単にこの格好が嫌なだけやし」

「やはり犯人にとってタイツマンは脅威に違いない！ きつと気付かなかっただけで、犯人に迫っているに違いないんだ！」

「人の話聞かんかい」

しかし言うだけ無駄というものである。

椿と付き合うには諦めと妥協と忍耐が肝要となるのだ。

「しかし、犯人も肝が小さいなあ」

竜胆は嘆息した。向日葵もうなずく。盛り上がっている椿を見て調査中止を諦めたらしい。

「そうだよね。たかがお弁当泥棒ぐらいで脅迫状なんてねえ」

「たかが弁当、されど弁当、か？ ろくに手掛かりすらつかんでへんっちゅうんに」

竜胆はやれやれとため息をついた。
と、

「あ、ねえねえ椿ちゃん」

ケータイで時間を確認していた向日葵が椿に声をかけた。

「ん、なんだい？」

「ここは一つ捜査の基本、犯人は現場に戻ってくる！　ってことで、一回教室に戻らない？　もうすぐ授業始まっちゃうし、次の時間は移動教室でしょ？　誰もいないから犯人も戻ってきてるかも」

それを聞いた椿は、ぱあっと顔を輝かせた。

「そうだな！　うん！　それでいこう。向日葵もやる気になってくれたんだなあ……私は嬉しいよ」

「あはは、椿ちゃんったら」

「さあ、そうと決まれば善は急げ！　いざ出動だ！」

意気揚々と歩いていく椿を横目に、竜胆はこっそり向日葵に言う。

「ってか、あんた教室戻ってあわよくば自分のお弁当食べようっちゃう腹やる？」

向日葵はにっこり笑う。

「リンちゃんは反対？」

言われて竜胆は首を横に振った。竜胆だってお腹がすいているのだ。

「腹が減っては戦はできん。はよ行かんか」

三人が歩いていると、突然椿が振り返った。大袈裟な程ひそめた声で二人に告げる。

「教室に犯人がいる場合を想定して、ここから先は抜き足差し足でいくぞ」

「はいはい、質問！ 抜き足と差し足ってなあに？」

「……やっぱり、忍び足で行こう」

「説明できんのかい」

椿はわざとらしく視線をそらして口笛を吹いている。

さて、教室が近づくにつれ（椿だけだが）緊張が高まる。静かに静かに進んでいた三人だったが、教室の中に人の気配を感じて顔を合わせた。

現在、午後の授業開始の五分前。次の時間は移動教室で割と遠いところなので、この時間帯に教室に人がいることは滅多にない。

ひよっとするとひよっとするのかと三人の間に緊張が走った。

三人は僅かに開いた教室の扉の隙間から中を覗き見る。
無人の教室の中で、誰かが弁当を貪っている姿が見えた。

「あれ、あたしのお弁当！」

小さな声で向日葵が悲鳴を上げる。

「なんや猛烈な勢いで食べよんなあ」

「現行犯だ。一斉に飛び出すぞ。一、二の、三！」

勢いよく教室の扉を開け放つと、三人は一斉に教室の中に飛び込んだ。

「こら、お弁当泥棒！」

向日葵が目を三角にして怒鳴る。

「む、んぐぐぐ」

犯人は突然怒鳴られたことに驚き、弁当をのどに詰まらせた。そしてその犯人は、つい先ほど椿たちを糾弾していた人物で、

「桜さん！？」

三人は目を丸くした。普段のお嬢様然とした彼女の様子と弁当泥棒というのがどうにもこうにも結びつかない。

が、椿は今まで見えなかったことが一気に理解できたような気がした。

犯人は「手作り弁当」を盗むという。なのに今日桜が持っていたのはシェフの作った弁当だ。手作りであることは確かだが、他の被害者の弁当とは一線を画している。また、桜の弁当はきれいさっぱり中身がなくなっていた。米粒一つすらなかったそれは、よくよく思い返せば最初から中身が入っていなかったかのようだ。洗って返すにしても今までのケースからすると弁当箱が返されるまで時間差が生まれてくるはずで、とすれば桜の弁当は最初から空だったと考

えた方が納得がいく。

今回の桜の弁当が盗られたという狂言は、恐らく疑いの目を自分から逸らすためだったのだろう。
どう考えても藪蛇だったが。

桜は忌々しげに三人を睨みつけた。

「見られてしまったのならしょうがないですわね」
「なんや、やる気か？」

竜胆が身構える。椿もノリノリで戦闘の構えをとった。向日葵はいつでも逃げられる体勢をとった。やっぱり息が合っていない。
警戒心をあらわにする三人に、桜は高らかに笑う。

「こう見えてもわたくし、剣道の心得がありましてよ！」

「あんた素手やん」

「ぎゃふん」

「……本当に言う人いるんだな」

「椿ちゃん、今そういう場合じゃないでしょ」

向日葵のもっともな突っ込みに、流石の椿もばつが悪そうに咳払いをした。

「桜さん、どうしてお弁当泥棒だなんて……」

話を本筋に戻すと、桜はさっと顔を伏せた。

「そやそや。桜さん、シェフのスペシャルなんたら弁当があったん
ちやうんか」

竜胆も厳しい顔で言う。向日葵も弁当を食べられたのに腹を立てているのか、ふくれっ面で桜を睨んでいた。

桜は黙っていたが、やがて蚊の鳴くような声で呟いた。

「だって、美味しいんですもの」

「は？」

三人は首を傾げた。

「桜さんって、いつもカフェテリアでロイヤル定食食べてるじゃない。あっちも美味しいでしょ？ おかず一品だけでもリンちゃんのお弁当くらいはありそうなやつ」

「最後のは余計や」

竜胆が渋面で言う。

二人のやり取りに桜は小さく苦笑した。

「だって、本当に美味しいんですもの。シェフの料理もカフェテリアの料理も、なんだか味気なくて……」

向日葵が頭をひねる。

「うーん、確かに他所の家の柿の木から盗って食べたら最高に美味しいけどお……」

竜胆が慌てて向日葵の口をふさいだ。向日葵の過去の悪行には竜胆自身もすっかり片棒を担いだものがあるからだ。

「……そうじゃないんじゃないかな」

ずっと考え込んでいた椿が口を開いた。

「ほら、向日葵のお弁当って手作りだろう？ 手作りのお弁当っていうのは、愛情がたっぷり籠ってるからね。お金で買えない価値があるんだ」

「プライスレスだね」

マスターカードかよ、という突っ込みを竜胆はしなかった。そういう空気ではない。

「ああー……つまりは for you の精神うちゅうことやな？ 誰かのためにじゃなくて、あなたのために、うちゅうんか？」
「でも、冷凍食品とか昨日の晩御飯とかいっぱいあるんだけど。愛情たっぷりかなあ？」

向日葵が不服そうに言つと、椿がにっこり笑った。

「多少手を抜いていても、毎日朝早く起きてお弁当作ってくれるって事自体、私はとてもすごいと思うよ。向日葵のお弁当は向日葵のお母さんが向日葵の為に作ったんだろ？ だからそのお弁当は特別な味ってわけさ」

「……でも、うちでは無理ですわ。お母様がお弁当を作って下さらないし、わたくしが作るうとしても危ないと止められますし……」

桜はしょんぼりと肩を落とした。

たっぷり三秒は数えたころ、じつと眉根を寄せてうなっていた竜胆がぱんと手を叩いた。さも名案が閃いたかのごとく満面の笑みを浮かべる。

「そうや！　うちが桜さんのお弁当作つたるわ。そしたらもう他の人のお弁当食べんでもいけるやろ？」

その言葉に、椿もぱつと顔を輝かせた。

「そうだな！　確か竜胆は自分でお弁当作ってるし」

「一人分ぐらい増えたってへっちゃらだよね！」

向日葵もニコニコと笑った。

桜は信じられないものを見るように、三人を見つめた。

「皆さん……」

その双眸からハラハラと涙が流れ落ちた。

「ありがとうございます。本当に、ありがとう……」

その様子に、椿は慌てて桜の背を撫で、向日葵と竜胆は目を細めた。

突然竜胆が思い出したと言わんばかりに指を鳴らす。

「あ、でも弁当代は払ってや」

「……いい話が台無しだな」

「うつさいわ！　大体」

竜胆が反論しようとした時、チャイムが鳴った。本鈴である。

「げ、昼休み終わってしもたやんか！　この服着替えてないし、飯も食べ損なつたし、ついてへんわ……」

「リンちゃん一緒にご飯食べる？」

向日葵はこれからコンビニに行ってご飯を買ってくるので、五時間目に遅刻する気である。

竜胆は大きいため息をついた。

「遠慮しとくわ。椿、向日葵、とつと着替えんで」

「はい」

「了解」

二人は元気よく返事をする。

「じゃあ桜さん、またあとで」

「またね、桜さん」

「ほなな」

「ええ、また！」

桜はそういうと、授業のために教室を出て行った。

残った三人は制服に着替え、多少遅れながらも授業に参加することができたのだった。

こうして、学園を騒がせていた連続弁当窃盗事件は解決した。その後、桜は今までの被害者の一人一人に謝罪行脚をしたそうである。

無事事件を解決することができた三人は報酬を受け取ることができたのだが、その後数日は三人を見てひそひそと交わされる噂話に向日葵や竜胆が落ち込んだことは言うまでもない。

とある私立の女子高校は、世間一般ではいわゆるお嬢様学校として認識されている。戦前から存在したその女子高校は中高一貫教育で、偏差値も全国的に見て高く、セレブ率も高い。

しかしてその実態は、学園長の趣味による私設戦隊があるなんとも珍妙な学園なのだった。

（後書き）

この原作のラジオドラマ、恐ろしいことにコンテストに出したんですよ。若さって怖い。当時のタイトルは「進め！ 学園戦隊タイツマン」でした。当時の審査員の方、本当にごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7465o/>

進め！ 学園**

2010年11月6日19時30分発行